

一人ひとりを大切にする具体的な保育

11

心地よく くつろげる空間

ユリア

愛知県碧南市・へきなんこども園園長

1 一人ひとりの保育士の気づき

前回（4月号）では、保育を変化させるきっかけとなったことが、「保育士がどう感じるかと問うたことで、心が動いた」ということについてお話ししました。子ども一人ひとりの保育実践について描いているのに、急に保育士の気持ちについて言及したので、少し戸惑われた方もいるかもしれません。しかし、この「一人ひとりを大切に保育」を実践していく時に、気づくことがあります。それは、子ども一人ひとりも大事にするためには保育士一人ひとりも大事にすることが必要であり、環境につ

いても、子どもにとって居心地がよいということは、大人にとっても心地よい空間になるのではないかと思います。

そうした環境の中で、子どもたちが自分が大切にされていると感じ、自分にとって心地よい、安全で安心なところであると感ずる時、自己肯定感や自己有用感が育ち、それぞれの力を伸ばし、創造性を発揮していくこととなります。

一人ひとりを大切にする具体的な保育を実践する時、保育士にも創造的に保育していくことが必要になります。一人ひとりの保育士の気づきによって遊びの環境を整えたり、言葉掛けの方向を考えたりしていきます。そうした保育士の姿を見て、子どもたちの育ちもさらに支えられているように思います。

2 気づきのきっかけ

具体的に例を挙げてみましょう。

乳児クラスの玩具については、基本的に保育士が片づけるのですが、そうすることで子どもたちが片づけられなくなるかというところではなく、片づけている保育士の姿を見て片づけるということが自然にできるように育つようです。

以前にも述べましたが、「片づけなさい！」といって片づけさせようとし、実際に片づけていない大人を見ることが、お片づけしない子に育つような気がします。

同じように、「話が聞けないんだよね」と思うようななら、もしかしたら、自分が子どもたちの話を聞いているかどうかを確認したほうがよいように思います。

こうしたことが気づきのきっかけになります。当たりまえのことですが、様々なことがつながっていると感じます。

3 多様性を受け入れる

また、一人ひとりを大切にするということは、つまり多様性を受容する、受け入れるということでもあります。このことを実践するためには、まず判断せずに受けとめることが必要になります。

ものごとには二面性があり、見る方向によって良くも悪くもなるように思います。どこをどう捉え、どう見るかによって、子ども一人ひとりの個性を捉える視点の幅も

広げたいものだと思います。

毎日繰り返される日常の中で、一つひとつの小さなことに、丁寧に向き合うことで、気づけば結果として全体的な発達が促されることを実感しています。

4 楽しいと思える日常の環境

また、自己肯定感を高める、自己有用感を高めるといった今必要とされていることも、日々一人ひとりの子どもに相對すること、自然に育成されていくと思います。さらに、自発性とか創造性といったことも、



●上・ソファで絵本を読む(4歳児)
他の子はそれぞれ遊んでいます
下・テラスでお茶を飲む年長児

日々充分な遊びの環境と時間・空間を準備し、子どもは保障された中で熱心に遊ぶことで、自然に育まれていくように思います。楽しいと思える日常の環境をつくっていくことの意義、見えないところ、隅や裏を美しく整えていくこと、色の環境を整えること、音の環境を意識し、声のトーン、玩具から出る音にも気を配る、もちろん、楽器の音の質にも気を配りたいものです。こんなことを述べさせていたただいていますが、実は、ピアノの調律をしばらくしていなかったことを思い出し、調律の手配を

しました。マリンバも糸が緩んでいた、間のゴムがなかったり、糸を支える金具が曲がっていたり、マレット(打楽器)のカバーを巻き直したり…。そんなことを、気がついた時にしています。

一つの小さな実践が全体的な成長発達につながっていく様子を見ることは、保育士にとって驚きであり、また喜びとなるようです。保育自体を今までこうだったからというのではなく、今までという理由で、そうしてきたのか、ぜひ考えてみるとよいと思います。案外、大人の都合でしていることがたくさんあるように思います。

大人の手順や段取りはもちろん大事なことです。そのことによって子ども一人ひとりの状態をより大事にするためには、何らかのやり方を工夫する必要があります。何かを変化させることは、なかなかエネルギーが必要なことですが、日々、生きいきと創造的に仕事をするには、楽しくやりがいを感じるようです。

5 子どもたちがくつろげる空間

多くの子どもたちが大人の労働時間より長い時間を園で過ごしています。そうした状況があるので、お部屋での居住性を大事に考えています。それで各部屋に子どもたちがくつろげる空間を必ず準備しています。



●上・大人用ガーデンテーブルでおしゃべりが弾む年長児たち
中・ソファでくつろぐ2歳児
下・室内遊び（2歳児）

疲れたら休むことができることを保障しています。

子どもたちの様子を見てみると、休憩したら自分のペースでまた遊び出す姿が見られます。ここにも、自分を知り、自発的に行動する、という育ちが見られます。こうしたことが、日常の安心につながっているように思います。

また、子どもたちが社会に出てからも、自分を知り、頑張るところは頑張るけれど、疲れたら休む、そして元気を取り戻したら活動するという、当たり前前のことですが、

セルフコントロールができることにもつながっていくことだと思います。

6 子育てにはたっぷりの時間が必要

子どもを一人の人として大切にすると、いう視点で考える時に、大人の労働時間については基本8時間と決められているのに、子どもについては決まっておらず、大人の都合に合わせて長時間の保育が行われています。国の方針ですが、不思議なことだと感じています。

日本の社会では、働く女性も増え、保育

施設で子どもたちが過ごす時間が増えていきます。子どもを育てるより、仕事が優先される社会的風潮があるように感じます。子どもを育てる時には、たっぷりの時間が必要なが社会的に認識され、子どもが体調を崩した時には、仕事より子どもと過ごす時間が必要であるといった社会的合意が形成されたいなど感じます。

保育施設を増やすことは必要ですが、子育てにはたっぷりの時間が必要であるという、社会的合意のある社会のほうが子育てしやすいのではないかと思います。